

# スズムシの飼い方

スズムシは、鳴き声の美しさから秋を代表する虫の中でも、最も人気のある虫です。コオロギの仲間で、自然の中ではススキなどの茂った少し湿った場所に住んでいます。

## スズムシの飼育容器

生態の観察や、容器の手入れなども簡単にできるプラスチック製の水槽が適当です。直接日の当たる場所やクーラーの風の当たる場所は避けてください。置き場所の近くで、蚊取りせんこうや殺虫剤は使用しないでください。

容器の大きさは虫の数、発育度によって違いますがイチゴのバック容器で幼虫時なら10匹位、成虫なら2〜3匹が適当です。あまり多く入れると運動をする場所が狭くなり、行動がにぶり、時には共食いをすることがあります。

## 容器の中に入れる土

雌に産卵させるため、雌の卵管より少し長い位の深さが

# スズムシ特集

入ります。ゴミの入っていない赤土(ねん土)を厚さ2cm位、容器の底に入れ、その上に小粒の砂を2cm位敷きます。

容器の中に土を全面にひくよりも、産卵箱の中だけに土を入れ、飼育した方が掃除しやすく、カビや細菌が繁殖しにくいための衛生的です。

土は園芸用の赤玉土や川砂を3日くらい直射日光に当てるか、フライパンなどで、土をいるようにしながら30分くらい火を通すとよいです。自然のまま使うと、後で土の中の細菌で卵がいたんだり、他の虫の卵や幼虫が混じっていたり、また草の根や種子が入っていたりして飼育できないことがあります。

スズムシの飼育を始めた次の年は、たぐさんの幼虫がでますが、ほとんどは2・3年で絶えてしまいます。毎日の汚物や餌などで土が畑と同じようになり、虫が生活になじみず、卵も土の汚染でふ化できないことが原因の一つです。土は2年毎にとりかえることが大切です。

## 土の湿り具合



畑の場合と同じ位の湿り具合が適当です。

飼育中は土の水分に注意し、餌に水分が十分含まれているときは水を補う必要はありません。

湿りすぎになると餌も早く腐り、虫を弱めます。土が白く乾いているときだけスポイドで土に直接水を与えてやりま

す。灰は水分の調整に役立ちますがあまり期待しすぎない方がよいです。

## 幼虫の飼育



ふ化した幼虫は、体長3mm位で白い触角がよく自立ちま

す。とまり木や鉢のかけらを入れ、暗い場所を作り、スズムシの休む場所を作つてあげましょう。

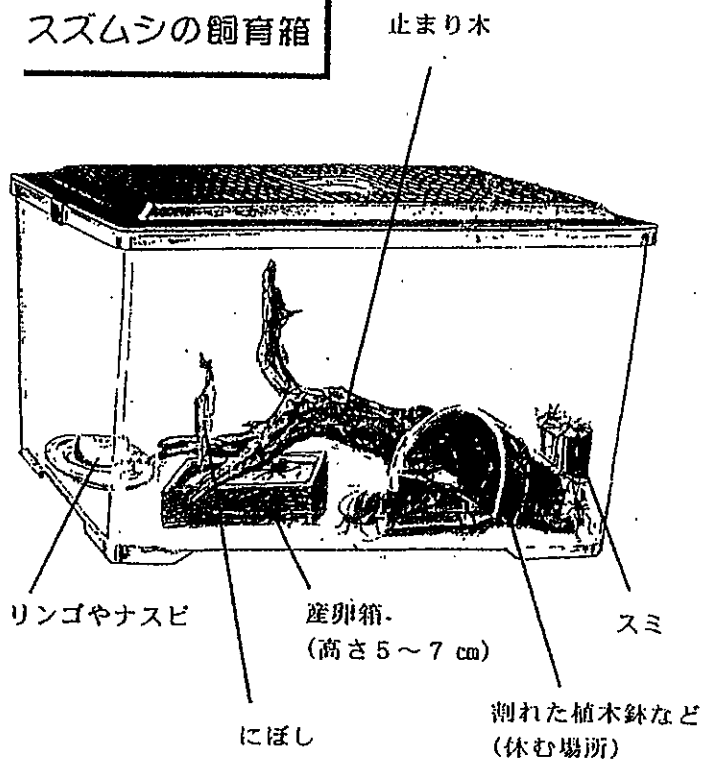
## 成虫の飼育



卵からふ化した幼虫は脱皮を繰り返しながら、約2ヵ月で成虫になります。脱皮後は体全体が白色をしています。脱皮した皮はすすむしが食べるようです。

オスの特長は大きな羽根があり、美しい音色を出して鳴きます。メスには、長い産卵管があります。

## スズムシの飼育箱



## 餌の与え方



2、3日おきに、餌を取り替え、1週間に一度は、糞の掃除をしましょう。

餌は、植物質のナス、キュウリ、リンゴなどの他に、にぼし、けずりぶしなどの動物質のものも与えた方が、ともぐいなどをしないようです。(けずりぶしは、スズムシが散らかすので、水で練ってから与えた方がよい)。

餌は、入れ物(皿など)に入れたり、くしに刺したりして置き、産卵用の土の上や飼育容器の底には、直接置かないようにしてください。

## スズムシの移し方

幼虫のときは、成長するに従って飼育箱のスズムシの数を少なくしてやらなければなりません。スズムシを他のビンに移す方法は、けずりぶしを防腐剤の入らないのりや竹べらにくっつけて、ビンの中に入れておくと幼虫がそれに捕まりますから竹べらを静かに取り出して、他の飼育容

器に移します。

スズムシが逃げ出した場合も、体が柔らかいので手でつかむようなことはしないで、コップの中に追い込んだり紙切れや割り箸に上らせてから飼育箱に移してください。

### 雄雌の区別



鳴くものはすべて雄で、雌は鳴きません。

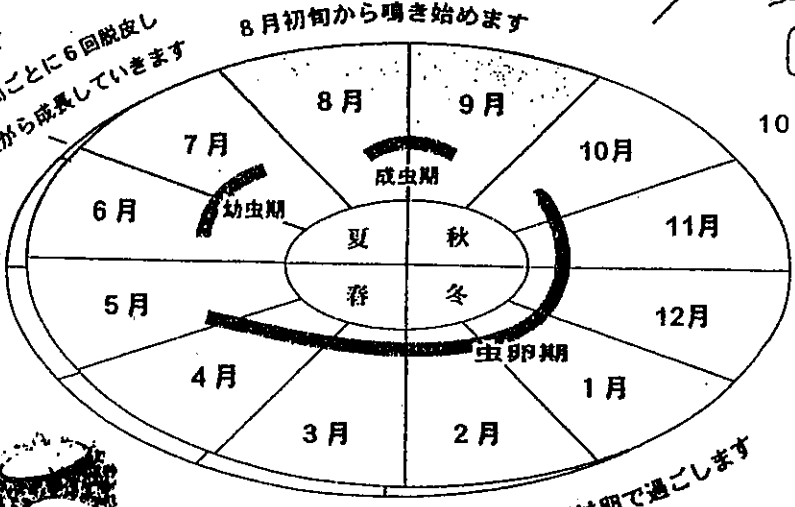
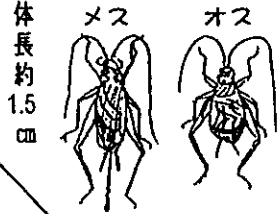
ふ化して1ヵ月経過すると、雌には小さいながら尾毛の間に針のような産卵管ができてきます。成虫になると、羽根のつくりが雄と雌では大きく違います。雄はスイカの種子を大きくしたように丸味を帯びていますが、雌の羽は雄に比べ細長くなっています。

⑥

◎スズムシの人工飼育の始まり  
江戸時代中期に越後の国に忠蔵という男が、根岸の里(今の台東区、上野公園あたり)で、たくさんスズムシを捕まえて持ち帰りました。大変よい声で鳴くので、近所の人たちにわけてやりました。その中の人、すずむしを何時までも鳴かせたいという思いから様々な工夫がなされ、18世紀の末頃から人工的に飼育され始めました。  
(スズ虫日記 松井智和著から)



### スズムシの一生



スズムシの飼育は、スズムシのいろいろな習性や生態が観察でき、結構楽しいものですよ。小さな生命、自然を大切にすることが生まれます。

餌をやったり、掃除をしたり、毎日観察することが大切です。

飼育日記もつけましょうね。

